

継承する芸術家 Jeannie—Tillie Olsen の *Tell Me a Riddle* における Jeannie の役割

河 島 美 代 子

Tillie Olsen は自らの伝記的事実を背景に、社会的階級、人種、性別を基に人生が決定付けられていく人々、とりわけ、周縁化される労働者階級の女性の苦闘を描いている。Olsen の *Tell Me a Riddle* (1962) に収録される “I Stand Here Ironing”、“Hey Sailor, What Ship?”、“O Yes”、“Tell Me a Riddle” には David と Eva を始めとする 3 代に亘る家族が登場し¹⁾、母性、宗教、異人種の友情、生と死等、様々な主題が組み込まれた壮大な人間愛の物語がこの家族を通して展開される。場所の設定は幾つかの地名が言及されるものの、特定の町や地域というよりも何処にでもある誰の町でもありうる (O'Connor 24) ため、特定の家族の限定的な話題でありながら、普遍性をも備えた物語となっている。主人公 Eva は自らを “Race, human; Religion, none” (“Tell Me a Riddle” 80) と定義づけ、独自の宗教観を提起している。また、*Tell Me a Riddle* の中心的テーマともいべき母性について “I Stand Here Ironing” や “Tell Me a Riddle” では、子どもに無償の愛を注ぎ慈しみ育てる慈母のイメージを崩した母親像を描き、母性神話の裏側の顔ともいべき抑圧性に肉薄している。母娘関係についても深い洞察が示されており 1960s における Betty Friedan に並ぶ 1950s フェミニズム思想の先駆者の気概が表されている (Burstein 97-8)。

Olsen は *Silences* のなかで “discontinuity” (*Silences* 27) という言葉を使い、女性の人生は連続性を断ち切られており、そのことが創造性の壁となっているという。Banks が解釈するように、育児と家事によって Eva は自らの創造性を発展させることなく生きてきた (Banks 159)。Eva の人生は妻、母、祖母として期待される役割を果たすために費やされ、彼女の個人としての人生は生きられることも語られることも無かった。長女 Clara が嘆くように女性の物語を歌う声は届けられることなく、世代間で途切れてしまう “Where did we lose each other, first mother, singing mother?...I do not know you, Mother. Mother, I never knew you” (107)。しかし、*Tell Me a Riddle* の登場人物の中で Jeannie は不連続性を免れうる存在である。彼女は人々の語られることの無かった物語を聞き次の世代に伝える、いわば世代間の人々の継承者となる (Fyre 99)。Jeannie は 4 作品のうち 3 作品に登場するものの、いずれも主人公ではない。主題の中心から離れた脇役ながら、3 作品の中で様々な物語を聞き、人間愛の連続性を目撃する。そして “Tell Me a Riddle” において Jeannie は祖母 Eva の捜し求める自己像の再構築に寄与し、Eva をスケッチという記録に留める。Jeannie は未熟な面を持ちながらも、自身が目撃し聞き取った様々な物語を受け止め、次の世代に継承する芸術家となる可能性を秘めているのである。

本論文では “Tell Me a Riddle”、“Hey Sailor, What Ship?”、“O Yes” に登場する Jeannie について考察する。それぞれの作品において、作者 Olsen が短編集のなかで果たす役割にふさわしい性格を Jeannie に与えていることを論証する。

1 章 “Tell Me a Riddle” 継承する芸術家 Jeannie

“Tell Me a Riddle” は *Tell Me a Riddle* の最後に収録されているが²⁾、他の3作品に登場する家族の源であり最初の人々 David と Eva の物語である。二人は1905年のロシア革命時の活動家でシベリアでの抑留生活と逃亡を経てアメリカにやって来たユダヤ人である。夫婦と6人の子どもたち Hannah、Paul、Vivi、Sammy、Lennie、Clara、孫の Jeannie が主な登場人物である。Eva は中心的人物であるが、彼女の名前は物語の終盤まで明かされない。Eve と似ていることから最初の女性でもあり、every woman、誰にでもなりうる物語として読まれていることが多い³⁾。“*Never again to be forced to move to the rhythms of others*” (68) と誓う Eva は、自分の人生の意味を再認識しようとする。作品は4部構成で1～3では Eva が生きられなかった自己像を取り戻すべく、様々なものを捨て去り、過去の声に耳を澄ます姿が描かれる。4において Eva の自己像が回復され、Jeannie のスケッチへと結実する。そのため、まず、1～3においては Eva の現在と回想をたどることで Eva の半生とその喪失の歴史を探る。4については Jeannie が果たす役割について考察する。

冒頭は一組の夫婦の結びつきが、47年の結婚生活を経て大きく揺らいでいる様子を描写する。子供たちは独立しているが、両親の不仲を聞いて動揺する。直接の原因は夫 David が現在の家を売却し2人で施設 Haven へ入居しようとしているのに対し、妻 Eva が同意しないことである。David は話し合いを試みるが、Eva は夫の声を聴かなくて済むように補聴器の電源を切っている。

聞くという行為はこの物語のひとつの主題になっている (Burstein 98-99)。Eva は他者の要求を退けた向こうに自分の過去の声があり、人生の意味の謎を解くことが出来ると考えている。聞きたいものだけを聞くために様々なものを捨て去るが、まず切り捨てられるのは Haven 入居をめぐる David との対話である⁴⁾。David が二人の未来の話をすればするほど、Eva の意識は過去へと遡っていく。Haven での生活の利便性を訴える David は Chekhov や Peretz の読書サークルで Eva の気を引こうとするが逆効果である。

Old scar tissue ruptured and the wounds festered anew. Chekhov indeed. She thought without softness of that young wife, who in the deep night hours while she nursed the current baby, band perhaps held another in her lap, would try to stay awake for the only time there was to read. She would feel again the weather of the outside on his cheek when, coming late from a meeting, he would find her so, and stimulated and ardent, sniffing her skin, coax: “I’ll put the baby to bed, and you—put the book away, don’t read, don’t read.” (67)

Chekhov の読書サークルは若い頃の苦い思い出につながる。読書サークルに出かけたいという Eva に David が協力的ではなかったことや帰宅した David に深夜の読書時間すら奪われていたことが蘇ってくる。Eva の記憶する David は彼女の切実な知識欲を意に介さず、自己の欲望を押し付ける存在だ。次に Haven 入居のための金銭の話題が出ると、Eva はやはり遠い昔の赤貧時代を思い出す⁵⁾。そして二度と孤独を他のものと交換しない、他者のリズムに合わせて生きることを強いられたくないと強く思うのである。

Eva が他者の要求を退け、自分自身のリズムで生活しようとして強く決意する原動力になっているのは怒りである (Burstein 99)。他者からの絶え間ない要求の声に応じて人生を過ごしてきたが、子供

たちも独立した今、Eva は平穏な時間を手に入れ、依然衰えない書物や音楽への渴望を満たしている。Eva の知識欲は若い日の友人 Lisa との交流に凝縮され表現されている。Lisa と Eva を結びつけるものは書物であり、Eva が禁じられながらも Lisa のもとへ通った様子は次のように描かれる “...my father beat me so I would not go to her. It was forbidden, she was a Tolstoyan. At night, past dogs that howled, ...in the snows of winter...to books. To her, life was holy, knowledge was holy, and she taught me to read” (103)。Lisa に読み方を教えられたというように、Lisa は Eva の師であり、Eva にとっても知識は聖なるものなのである。Lyons が Eva を “a spiritual portrait of the artist as an old woman” (Lyons 146) とよぶように、Eva が内容を暗記している本を眼鏡と拡大鏡を併用して更に読み返し、蓄音機の音量を大きくして音楽を聞く様子は芸術活動に飢えた求道的芸術家を思わせる。そんな Eva の至福の時間を脅かすのが David の Haven への入居話なのである。体調がすぐれない Eva は David の外出をめぐって口論するうち、初めて怒りを爆発させる。Eva の怒りは長年の結婚生活の中で David の都合に振り回されながら暴言や嘲りに耐えて沈黙してきた怒りである。このように、Eva の耳は過去の声を聴き、David は未来を語る中、Haven 入居をめぐる話し合いも結論が出ないまま Eva の癌が発見される。

2 においては、癌について Eva 本人に知らせないまま “Let us go home” (79) と繰り返す Eva を David が宥めすかして子供たち—Hannah、Vivi—を訪ねる二人の旅が描かれる。Eva は子供たちとの対話の中で宗教を否定し、祖母としての役割も拒否する。2 人の旅は Eva の失われた自己像探求の旅ともなる。

Eva のユダヤ教の教義への猜疑心はラビの訪問をきっかけに表面化する。Eva は病室に来たラビを悪魔に見立て、ユダヤ教信者として登録されているというリストの書き直しを Hannah に訴える。さらに Eva は宗教など不要だと言い、人種で分類されるのも拒否する。そして Hannah がともす食事時の感謝の祈りのろうそくの欺瞞性を皮切りに、宗教批判を展開するのである。

Eva が次に拒否するのは孫の面倒を喜んでみる祖母としての役割である。Vivi の家では赤ん坊がいる。皆は Eva が喜んで赤ん坊を抱くことを当然のように思い、赤ん坊を差し出す。しかし Eva は赤ん坊の感触が呼び覚ますものから逃げ出したくなる。

The love—the passion of tending—had risen with the need like a torrent: and like a torrent drowned and immolated all else. But when the need was done—oh the power that was lost in the painful damming back and drying up of what still surged, but had nowhere to go....Surely that was not all, surely there was more. Still the springs, the springs were in her seeking. Somewhere an older power that beat for life. Somewhere coherence, transport, meaning. If they would but leave her in the air now stilled of clamor, in the reconciled solitude, to journey on. (83-4)

これまでの人生において Eva は子供たちを母性と言う奔流のような愛情で育て、それ以外の全てのものを犠牲にしてきた。子供たちへの愛情を否定するわけではないが、それでも彼女の人生には子育てのほかに生きるエネルギーを注ぐべき何かがあったはずなのだ。母性愛の抑圧的な側面を Eva は拒否し、他者を世話することで放棄してきた何かの再生を求めているのだ。Vivi の子供たちが “Tell me a riddle, Grandma” (86) ⁶⁾ と言いながら遊び相手になってほしいと寄って来ても Eva は断り、

孫の問いかけに対して祖母として当然期待される反応を返さないことで他者の要求や欲望に応える養育者の役割を拒否するのである (Coiner, "No One's Private Ground" 188)。

3において、Eva の探求の旅は Jeannie の計らいで海辺の町に到達し、自己像の原点ともいべき踊る少女像を垣間見る。海岸で砂を一掴みハンカチに包み頬にあてる Eva は、何百万年も昔から生命を育ててきた海を見て、一粒の塵に還る自分自身をも含めた生命の神秘と向き合うのである (Orr 110)。Eva は昔からの知り合いに出会い⁷⁾、歌の集りに誘われる。Eva は多くの人が集う中、補聴器のスイッチも切り、視界も遮りたい思いで座っている。ここでも Eva は周囲の音を拒絶し、自分の内なる音に耳を済ませるのである。人々の歌声は子供たちの歌から母親たちの低唱やセレナーデとなり、ベートーベン、葬式の歌を経て労働歌となる。そうするうちに、Eva の音も視界も遮った世界に浮かび上がるものがある。

While from floor to balcony to dome a bare-footed sore-covered little girl threaded the sound-thronged tumult, danced her ecstasy of grimace to flutes that scratched at a cross-roads village wedding

Yes, faces became sound, and the sound became faces; and faces and sound became weight—pushed, pressed (97) ⁸⁾

Eva の脳裏に浮かぶのは故郷 Olshana の村の結婚式でフルートに合わせて踊る裸足の少女、Eva 自身である。音楽に合わせて踊る自分自身の記憶が映像のように蘇ると回想の中の人々の顔や音楽もよみがえり動き始める。この少女が Eva の探求する自己像の原点なのである。

4において Eva の病状は悪化し、Jeannie が看病のためやってくる。Jeannie は Eva の若い日の唯一の友人 Lisa になぞらえられている。Jeannie は Lisa がかつて Eva を知の世界へと導いたように、Eva が自分自身の声を取り戻す手助けをする。まず、Jeannie は死者のパン "*Pan del Muerto*" (100) を Eva に見せ、Rosita という少女の葬式の話をする。葬式はメキシコでの風習で、死者が好んで踊った歌を演奏することで弔いをする、パーティーのようなものと説明する。それから Jeannie は友人に頼んでサモアの伝統的踊りを披露してもらう。Eva は彼らが帰った後も太鼓の響きが聞こえ、彼の踊りや仕草を繰り返してみるのである。Rosita の葬式やサモアの踊りには歌、音楽や踊りなど、Eva が垣間見た自己像の要素が含まれている。Jeannie は Eva が必要とするものを的確に与える教師の役割を果たしているのである。

次に Jeannie は Eva への愛情と芸術への愛情を一体化させ (Pearlman 108) Eva を 2 枚のスケッチに収める。Jeannie のスケッチは個人としての Eva と家族関係の中の一部としての Eva を捉えている。1 枚目は Eva の肖像画で、音楽を聴きながら寝ている姿が "*coiled, convoluted like an ear*" (102) として描かれる。その姿は Eva が自分の人生に意味を見出そうと過去の声に耳を澄ませる探求者としての姿と音楽に耳をそばだてている様子を象徴的に捉えている。もう 1 枚は David と一緒に、家族のつながりの中での Eva の姿である。2 人が手を握って寝ている様子は次のように描かれている "*the tall pillar feeding into her veins, and their hands, his and hers, clasped, feeding each other*" (115) ⁹⁾。治療の一環として Eva の血管に栄養剤が注入されている様子と David と Eva のつながれた手が一枚の絵の中に描かれることにより、二人は互いに栄養を与え合っているように見える。David は Haven 入居をめぐる Eva との和解を対話の中に求めてきたが、Jeannie のスケッチを

見て、沈黙のほうがより効果的に互いを理解できると気づく (Pearlman 108)。David はスケッチが死から守ってくれる楯であるかのように感じ、片方の手でスケッチを、もう片方の手で Eva の手を握り眠るのである。スケッチに描かれた手を取り合った David と Eva の姿は 2 人の再生された絆を象徴しており、Jeannie のスケッチは一度失われた絆を記録するのである。

更に Jeannie は Eva の昔話りの聴き手となる。死期が迫る Eva は饒舌になって、David や娘たちではなく Jeannie を相手に、何世代も前の女性たちの生き様や思い出話をする。Eva は自らの中で長く眠っていた記憶を Jeannie に伝え、Jeannie はそれを言葉にし、女性たちの埋もれていた歌が蘇るのである (Duncan 240)。Jeannie は Eva の昔話を真摯に受け止めることで何世代にも亘る女性たちの物語の継承者となるのである。

Jeannie は Eva の看病をする傍ら、祖父 David の慰め役もこなしている。Jeannie の励ましを受け、Eva と向き合う David は彼自身の記憶を蘇らせる。そうすることで David は Eva を個人として認識し、初めて妻の名前を呼ぶ。以下の引用は Eva が匿名性を脱し、名前も歴史も持つ個人として David の前に浮かび上がる瞬間である。

And instantly he felt the mute old woman poring over the Book of the Martyrs; went past the mother treading at the sewing machine, singing with the children; past the girl in her wrinkled prison dress, hiding her hair with scarred hands, lifting to him her awkward, shamed, imploring eyes of love; and took her in his arms, dear, personal, fleshed, in all the heavy passion he had loved to rouse from her.

“Eva!” (115)

David の意識は徐々に過去へと遡り、若い日の Eva の姿を見出し、愛情がこみ上げてくるのだ。

Jeannie は Eva が最期に捜し求めていた自己像へと回帰していくのを見届ける。作品の中にちりばめられていた踊りや音楽の要素は最終的に村の結婚式で踊る少女の姿に収斂していきながら、Eva がたどり着く自己像となる。Jeannie は Eva の探求の旅を海へいざない、Eva を看病する傍ら、音楽を聞かせ、踊りを見せ、Eva の過去の物語を聞き、個人としての Eva と家族の関係性の中の Eva の姿をスケッチに収める。Eva が死を迎える結末は本来なら悲劇的なものとなるところで Jeannie が Eva の死を読み解き意味を与えることにより再生の場面となっている。Eva の捜し求めた自己像の発見を手助けしながら Jeannie は女性の物語の継承者となるのである。

2 章 “Hey Sailor, What Ship?” 社会性を身につけた残酷な子供

“Tell Me a Riddle” において Jeannie は、Eva の心の声に耳を澄ませ求めに応える優れた看護師であった。最初の女性 Eva の物語の継承者となる Jeannie であるが、“Hey Sailor, What Ship?” や 3 章で取り上げる “O Yes” においては、各作品の主要人物たちに冷徹な批判の目をもち思春期特有の好戦的な弁舌を容赦なく浴びせる敵対者のイメージすらある。大人と子供の両面を持ち合わせた Jeannie の 15 歳と言う年齢が遠慮のない言葉で真実を吐露させるとき、作品の主題はより鮮明になる。Jeannie の性格設定は、作者 Olsen の操作により短編小説の凝縮された世界で効果的に機能し

ている。

“Hey Sailor, What Ship?”は4部構成で、主に Whitey の Lennie 家への2回の訪問を描いている。孤独な Whitey が人との密接な絆を求めつつも手に入れられず苦悶する物語である。アルコール依存症の Whitey はお金も頼る人もなく、旧友 Lennie に救出される。Lennie の丘の上の家は Whitey にとって愛や家庭の温かさ、安心を象徴する (Pearlman 67)。根無し草のようなこれまでの人生の中で Lennie 家は灯台のように Whitey の行くべき道を示し Whitey を支えてきた。Whitey は船乗りとしての生き方と Lennie 家の一員のような陸での暮らしとの生き方の間で迷っている。Whitey の迷いにおいて作者 Olsen は、男性が結婚生活や家族を拘束的で閉塞感をもたらすものと危惧し、冒険世界へ逃避するために船乗りの暮らしを希求するという馴染みのある文学的形式を覆している (Faulkner 75)。Whitey はむしろ、他者との結びつきを強く願いながら共同体の中で機能することが出来ず、航海の日々を続けるのである。孤独を抱える Whitey はアルコールによってのみ現実逃避できるのである。

Banks は Olsen の文章は多くが断片であり、イタリック体や括弧入りであることを指摘し、このような書き方のスタイルは主要人物たちの生き方のスタイルを反映させたものだという (Banks 158)。Banks の指摘するスタイルは *Tell Ma a Riddle* のなかの4作品において共通して見られるが、“Hey Sailor, What Ship?”においては2つの要因が含まれる。1つはアルコール中毒の Whitey の混濁した意識を通して現実と過去とが交錯して語られていることである。もう1つは共同体での継続的な人間的つながりを満足に築けていない彼の人生をあらわしている。船乗りとしての彼の人生は、ひとつの関係性から次の新たな関係性の中に入り、その関係性も断ち切れ次へ移行するという生き方のスタイルが続いている。このスタイルは Whitey に他者に縛られない自由を与えつつ、彼自身を他者から切り離された存在に閉じ込める (Park-Fuller 296)。Whitey は Lennie 一家との安定した暮らしに憧れるが、かなわず、海と陸の二者択一の間で揺れるのである。タイトルの “Hey Sailor, What Ship?” は船乗りの所属を聞く挨拶として使われ、Whitey の意識の中で何度も繰り返される。彼の仕事、彼のアイデンティティを示すものである。同じように彼の頭の中で繰り返されるのは “Lennie and Helen and the kids” (13) である。2つの繰り返される言葉は Whitey の生き方の迷いとして象徴的に使われている (Pearlman 67)。

Jeannie が Whitey と直接関わるのは Whitey が Lennie 家に滞在しているときである。破産状態で一家のもとへやってきた Whitey を Lennie の妻 Helen や子どもたち Carol と Allie は喜んで迎えられるが、Whitey が “(Helen? So...grayed?)” (16) と驚く様子に Lennie 一家との時間的空白が表れている。そして “Who is real and who is not?” (16) と思う Whitey に見えるのは一家の歓喜の渦から距離を置く Jeannie の姿である。背丈で Helen を追い越した Jeannie は言葉遣いや態度においても親を越えようとしている。泣き出す Helen を制し、Jeannie は母を台所に連れて行き Whitey が家に来たことへの不満を吐き出す。Jeannie は Whitey が以前に来たときの騒動やアルコールが原因で病院へ行った時の経緯を憶えており、懐かしさよりも不安が先に立つのだ。Jeannie は Whitey を友人に見られたくないとの思いから予定を変更して友人の家で宿題をする事にする。10歳の Carol や5歳の Allie のように旧知の訪問を素直に喜べない Jeannie の行動は思春期の娘としてごく自然である。

帰宅した Jeannie は、Whitey が Allie を抱いて寝ている様子や両親が手をつないでいるところを見て態度を軟化させる。Jeannie は Whitey への情愛を持ちながらも社会の目、とりわけ思春期の

Jeannie にとっては友人たちの目が一番怖いのである。社会性を身につけつつある年齢の Jeannie だからこそ Whitey の存在を隠したいというのは真実なのだ。それでも Jeannie は、厄介者 Whitey を迎え入れる両親を “peaceful wrecks” (22) と船に関係する言葉で表現し、呆れつつも受容している¹⁰⁾。そして Whitey に懐かしい挨拶をするのである “Hey Sailor, what ship?” (22)。Jeannie は Whitey に抱かれて眠る Allie の安心しきった寝顔と Whitey の満ち足りた様子を交互に見て、両者の間の一体感を感じ取る。そして手をつなぐ両親の姿に確かな繋がりを見出す。この場面は年齢や血のつながりを越えた世代間の連続性を示唆しており (Orr 88)、Jeannie はその目撃者となるのである。

次に Jeannie が登場するのは、Whitey が再度 Lennie 家を訪問する 4 部である。3 部において Whitey は “old vision” (24) に囚われ、Lennie 家での生活を妄想する。Whitey の妄想は、Whitey が Lennie 家の誰よりも先に帰宅して家族の留守の間に食料品の買い物を済ませ料理を作り掃除もして家族を迎え入れるというものだ¹¹⁾。この妄想は Whitey が海に出ているときも酒場や組合の集会のときも心に描いていた Whitey の夢の世界だ。そして 4 部である現実世界で Whitey は妄想を実現するため、贈り物と食料品を抱え帰宅する。一家の役に立っているという自負と誇りを持って家族として迎え入れられたいという長年の夢がかなう瞬間である。ところが贈り物をばら撒くように子供たちに与える Whitey に Lennie は戸惑いを隠せないし、Jeannie も無視をする。Whitey の再訪場面は Jeannie の心が再度 Whitey から離れていく、すれ違いの場面となるのである。Whitey の言葉遣いが汚くなりお酒を取り出すと友人たちの反応を一番気にする Jeannie は Whitey に注意する。Whitey がくれたイヤリングの札を言い譲歩を試みる Jeannie であるが、昔話を持ち出され怒りに火がつく。2 人の口論は以下のように Whitey の語られない Jeannie への思いとは裏腹に以前に贈った高価な時計の話題へと移っていく。

...After all, ain't she my wife?

Whitey, do I have to hear that story again? I was four years old.

Again? (...I'm married to Whitey now, I don't have to sleep by myself any more.) Sorry, royal highness, won't mention it. How's watch I gave you, remember?

(Not what he means to say at all. Remember the love I gave you, the worship offered, the toys I mended and made, the questions answered, the care for you, the pride in you.)

I lost the watch, remember? 'I was too young for such expensive presents.' You keep talking about it because that's the only reason you give presents, to buy people to be nice to you and to yak about the presents when you're drunk. Here's your earrings too. (30-31)

Whitey にとって Jeannie が 4 歳のときの思い出話は話すたびに気恥ずかしくも嬉しさが駆け抜ける宝物だ。Whitey は今でも 4 歳のときの Jeannie を思い起せるし、Jeannie がベッドにもぐりこんで来たときの感触や翌朝得意げに Whitey と結婚したからもう一人で寝なくていいのだと Jeannie が言ったことを思い出せるのだ。それは、Allie が腕の中に滑り込んできたときに憶えた衝撃と同じ、Whitey の深い孤独をつかの間忘れさせてくれる愛情溢れる記憶である。ところが Whitey はこの思い出がどれほど自分にとって大事なものかについては触れないまま、2 人の対立は激化する。Orr はこの場面での 2 人のすれ違いについて言葉の敗北であると言う。Whitey は Jeannie への深い愛情を

意識的に不正確に伝えている。一方の Jeannie は表層的な質問だけを聞き深い意味を読み取ろうとせず、過去を思い出すという彼女の役割を拒否している (Orr 89-90)。金銭で愛は買えないという常套句にしがみつき、Jeannie は Whitey から差し出された愛という贈り物を受け取ることを躊躇い、残酷な言葉を投げつけることで Whitey から遠ざかってしまうのである。

Jeannie の批判は Whitey が語らない彼自身の物語を Helen から引き出す契機となる一方で Jeannie が抱える矛盾を暴く。Helen の説明によれば、Whitey は 1934 年のストライキで Lennie を救った命の恩人である。以降、一家とは家族のような付き合いをしてきたのであり、アルコール依存症を理由に破産状態の恩人を追い出せないという Lennie の苦悩も明らかとなる。Jeannie は全てに反論し、Helen の説得を退ける。Jeannie の指摘には正しい部分もある。Jeannie が言うように、Whitey は愛を買おうとして贈り物の対価を一家への愛と同一視している。Jeannie は Whitey が立派だった若い頃、Lennie を助けたころのことを本当には知らないし、現在の Whitey を見て係わり合いになりたくないと思うのである。ところが Whitey と同じようにアルコール依存症の Mr. Norris を Jeannie は哀れな人だという。知的な会話をこなし、きれいな家に住んでいるというのが Jeannie の同情の理由だ。ここには Jeannie が知らず知らずのうちに身につけた階級差別意識が潜んでいる。Jeannie は Carol の冗談 “My class is divided by marks” (26) 「私のクラスは成績で分けられる」にあるように、社会階級によって人々が分けられることに気づいているし、まさにそれを理由として自分が Whitey と Mr. Norris への評価を分けていることにも気づいている。しかし Jeannie は Whitey のおかれた状況を理解する努力を怠り Whitey への嫌悪感を無防備にさらけ出してしまふ。社会階級の違いがもたらす影響を知りつつ、Whitey 個人の責に帰してしまう Jeannie の矛盾は同時に、階級を理由に定義されてしまう人々の存在を暴露する。

作者 Olsen は Jeannie の年齢を思春期に据えることで、子どもの残酷さと反抗期特有の抗弁を併せ持つ Jeannie を創り上げた。Jeannie の Whitey への批判は、Whitey が若い頃は他者と密接な絆を結び、ひとつの共同体の中で帰属意識を持ち生きていたという Whitey の語られなかった物語を Helen から引き出している。一方で社会階級によって人々が分けられる現実も見せている。Jeannie の遠慮のない批判によって、人生の敗残者のような Whitey の物語が意味づけされ蘇り、浮かび上がる効果を生んでいる。

3 章 “O Yes” 現実主義者 Jeannie

“O Yes” は中学生だった Olsen の娘 Kathie の経験に基づいており、深く絆で結ばれた人々を引き離す現実社会の状況を痛切に描いている。時代的には公民権運動の前で、政府が “tracking システム” を生徒に課したときのことである (Pearlman 31)。登場するのは白人家族 Lennie、Helen、Jeannie、Carol (12 歳) と黒人家族 Alva、Pariale (Parry) とクラスメート (黒人) で、異人種の母親同士の友情とその娘世代の友情の破綻を Parry の洗礼式の日とその数ヵ月後の一日の二日間を軸に描く。この章では Jeannie の性格設定が Helen の空虚さを暴き、人種差別の現状、社会階級の壁を明示する効果があることを示す。更に、そのような現状でありながら未来へ希望を遺す結末を迎えることを論証する。

物語の冒頭において Carol は Helen とともに黒人教会に来ている。白人は 2 人だけであり、慣れ

ない場所での Carol の緊張が描写される。Carol は母の手をきつく握り、もう一方の手は友人 Pariale (Parry) の手に軽く乗せている様子から、Carol が母だけでなく Parry にも心を許し頼りに思っていることがわかる。また、乗せられた手の軽さから Parry との友情が今後危ういものとなる予兆にもなっている。Carol は参列者の中にクラスメートを発見し動揺する。白人の自分が黒人教会に来ていることを学校で喧伝されるのを恐れる Carol だが、Parry は仲間内で流行っている話し方に夢中で Carol の孤立感は強まるばかりである。演壇では牧師の語りかけと参列者の “O Yes” の熱狂的な掛け合いが続き、賛美歌と手拍子や床を踏み鳴らす音の洪水の中で Carol は失神してしまう。

結局 Carol は Parry の洗礼式を見ずに帰宅する。洗礼式中座した経緯について泣きながら説明する Helen と Lennie のやり取りを聞いて、Jeannie は Helen に「大人になれ」と指摘する。

“Grow up, Mother.” Jeannie’s voice was harsh. “Pariale’s collecting something else now. Like her own crowd. Like jivetalk and rythmandblues. Like teachers who treat her like a dummy and white kids who treat her like dirt; boys who think she’s really something and chicks who...”

“Jeannie, I know. It hurts.”

“Well, maybe it hurts Parry too. Maybe. At least she’s got a crowd. Just don’t let it hurt Carol though, ‘cause there’s nothing she can do about it. That’s all through, her and Pariale Phillips, put away with their paper dolls.” (52-53)

母娘関係が逆転したようなやり取りは Jeannie が Helen の無知を糾弾する形で展開する。

まず、Helen は Carol と Parry の子供時代の遊びを列挙し 2 人の親密さを強調するが、Jeannie は Parry が既に他の新しいものを集めていると言いつ返す。新しい仲間や洗礼式で使っていたような “jivetalk” (53) 更には “rythmandblues” (53) を指しているが、これらは Parry が帰属する黒人文化の一端であり、その中で Parry は年齢にあった成長をしているのである。また、Jeannie は Parry が直面している社会環境の中での苦難についても言及する。先生や白人の子供たちが Parry をどのように扱うかについて Jeannie の目から見たありのままを説明する。Jeannie は Parry と交友関係を続けることで Carol が傷つく可能性について触れ、Carol と Parry の仲は終わりだと断言する。

更に Jeannie は Carol と Parry がこれから行く中学での生活について楽観視する Helen に追い討ちをかける。

“They’re in junior high, Mother. Don’t you know about junior high? How they sort? And it’s all where you’re going. Yes and Parry’s colored and Carol’s white. And you have to watch everything, what you wear and how you wear it and who you eat lunch with and how much homework you do and how you act to the teacher and what you laugh at...And run with your crowd.” (54)

Jeannie の説明によると、中学での “sorting” (54) とは子供たちの服装や交友関係、ふるまいについて細かな分類事項があり、人種や社会階級を背景に互いの差異について目に見える形での区別を

教えるものである。Helen が“sorting”を知らないはずはなく、母娘のやり取りを傍観していた Lennie が割って入る“Don't you think kids like Carol and Parry can show it doesn't *have* to be that way?” (54)。しかし Jeannie は中学生にも重くのしかかる人種と社会階層の差異が人々の絆を断ち切っていく現実を見せ付ける。

Jeannie の批判が正しいことを示すように Helen の思考は迷走していく。Helen は Carol が“sorting”について話したことがあるのを思い出すが、どの記憶もあいまいである。尊厳を傷つけられた少女の声にならない叫び“a mute cry of violated dignity” (54) も、家に誰もいなければ誰が宿題を手伝うのかという逸話もあまり関係が無いもので、深い理解には到達しそうにない。Lennie に助けを求めようとする Helen は次のように描写される“Len, my head hurts, she felt like saying, in Carol's voice in the car” (55)。Helen は Carol が洗礼式を中座して帰りたいと訴えたときの声を思い出しながら、Carol と自己を同一視することで Jeannie の問いかけに答えるという大人の責任を逃れるのである。Helen の窮状をよそに、Lennie は Jeannie の話を真剣に受け止め、説得を試みる。Lennie は Jeannie の批判に真摯に向きあっているのが窺える。

Jeannie が言及する先生たちの Parry への接し方は、本作のもう 1 つの時間、数ヵ月後の一日に詳述される。Alva の仕事が増え Parry は放課後妹たちの母親役もこなさなければならない。Carol は白人の友人 Melanie と過ごす時間が増え、Carol と Parry の仲は徐々に遠のいていく。Carol がおたふくかぜで学校を休むと Helen は娘たちが再び交流できる機会と捉え、Parry が宿題を届けることになる。以下は Parry が Carol に語らなかった Miss Campbell とのやり取りである¹²⁾。

But did not tell: Does your mother work for Carol's mother? Oh, you're neighbors! Very well, I'll send along a monitor to open carol's locker but you're only to take these things I'm writing down, nothing else. Now say after me: Miss Campbell is trusting me to be a good responsible girl. And go right to Carol's house. After school. Not stop anywhere on the way. Not lose anything. And only take. What's written on the list. (57-8)

Miss Campbell は Jeannie が言っていたように Parry を無能者のように扱う。細かく指図し Parry に口を挟む機会を与えず Parry の声を奪うだけでなく、思考力が無いかのように鸚鵡返しに復唱することを強いている¹³⁾。Parry が味わった屈辱は Helen の回想の中の“a mute cry of violated dignity” (54) の再現である。Parry が日常的に先生たちから受けている人種差別が Parry の声にならない叫びを通して表現されている。Parry の叫びは Carol にも届くことはなく、Parry の心の中に封じ込められ沈黙させられている。

Olsen の作品において、病気は深い感情の問題のメタファーとして機能する (Pearlman 87)。Carol は病気を通して孤独と向き合い、自己定義へのもがきを経験するのである。Parry が帰った後、Carol は Parry が教科書に口紅で落書きした顔に話しかけ、子ども時代に遊んだ人形の家やカードで一人遊びを始める。Parry と過ごした子供時代の幸福な時間を取り戻すかのようなようである。しかし、ラジオから洗礼式の教会で聞いた賛美歌が流れると抑えていた疑問が噴出する。Carol は教会での参列者たちの歌と叫びの熱狂ぶりが理解できず、Helen にこう問いかける“Mother, why did they sing and scream like that?” (60)。Helen は教会内の激情を説明しようとするが、Jeannie に“sorting”について自分なりの解釈を導き出すことが出来なかったときと同じように上手くいかない。次々と

浮かぶ説明を全て自分の中で打ち消し、結局、何も言えず Carol を抱くことしか出来ない。Helen が自分自身の空虚さに気づく場面において、Jeannie の指摘が正しかったことが証明される。Helen は Carol や Parry の置かれた状況について、また自分のしていることについて深く理解していない。Helen は差別のある社会環境の中で暮らし、差別を助長する学校に子供たちを通わせながら、一方で人種や階級で声を奪われた人たちと仲良くするように強いている。Jeannie が鋭く指摘するとおり、Helen は差別的な社会の中で楽観的な世間知らずであることが明示される。それでも Helen は未来に希望を持つことで Carol への答えとするのである “But may be friends again. As Alva and I are” (61)。

作者 Olsen は Jeannie の年齢を、親を批判し乗り越えようとする反抗期に設定することで、その遠慮のない発言から母 Helen が看過している現実世界の厳しさ、人種差別や社会階級の壁を明示させた。Jeannie が危惧するとおり Helen の楽天的な考えは Parry を傷つけ Carol を苦悩に追い込んでいる。しかし Jeannie の容赦ない糾弾が Helen の内省を促し、Helen は Carol の問いかけに対する答えが満足に出来ないながらも、未来への希望を言葉にして Carol に託すことができるのである。

まとめ

“Tell Me a Riddle” における Jeannie は語られることのなかった女性の物語の継承者として最初の女性 Eva の物語を 2 枚のスケッチに凝縮させる。Eva の個人としてのスケッチは Eva が自分自身の人生の意味を再認識するべく探求者として真実の声に耳を澄ませる姿を捉えている。もう 1 枚は家族とのつながりの中で Eva を捉え、人間存在の連続性の中に生きる Eva を表現する。Jeannie の芸術は時に言葉による意思疎通の困難を乗り越え、世代を超えて伝えうる可能性を秘めている。作者 Olsen は Jeannie を他の短編においても脇役として登場させる。いまだ成長過程にある Jeannie に反抗期で弁舌の立つ批判者の性格を設定することで、各作品において中心的主題をより鮮明にする役割を担わせている。脇役でありながら Jeannie の存在感は大きく、小説全体を引き締める機能を効果的に果たしていると言える。

注

- 1) *Tell Me a Riddle* のテキストは下記の版を用い、引用後、ページ数をカッコ内に記す。Tillie Olsen, *Tell Me a Riddle*. (New York: Dell Publishing, 1962).
- 2) 各作品の収録順序は Olsen の執筆順序と同じで “I Stand Here Ironing” (1953-53)、“Hey Sailor, What Ship?” (1953-55)、“O Yes” (1956)、“Tell Me a Riddle” (1956-60) となっている。
- 3) Eva を Eve や every woman としてみることは Eva 個人の物語を否定し、個々の女性たちの違いを消してしまうことだと Faulkner は主張する (Faulkner 86)。
- 4) 結婚生活における夫の行動に起因する妻の葛藤について Jones は、夫は家庭内での力関係において支配を好み、妻をコントロールする一策として対話を拒むという (Jones 50)。結果的に妻を孤独に陥れるこの方法として家庭への仕事の持込やテレビ、読書のほか本作で David が頻繁に行っている “going to meetings” (Jones 49) も挙げている。David が “a meeting” (67) に出かけ、家で子供たちを見てくれなかったので読書サークルにいけなかったのである。今になって Haven の読書サークルが話題になるのは “Because you want to be there with others” (66) Eva のためではなく他者と一緒にいたいという David の都合である。Eva が David との対話を拒む場面で興味深いのは沈黙を強いられてきた Eva が沈黙を武

- 器に David をコントロールしようとしていることだ。Eva は David との力関係において逆転を試みている。
- 5) David と Eva は若い頃と比較すると経済的に余裕のある暮らしをしており、Eva はアメリカで飢える者などいないという “And in America, who starves?” (67)。しかし、Eva は今なお知識や芸術に対する欲求において満たされず飢餓感を抱えている。Eva の発言 “who starves?” は豊かなアメリカに暮らしその恩恵を受けながらも飢えている自分自身への逆説的言及である。
- 6) “Tell me a riddle” はそのまま作品のタイトルとなっているが、Coiner はタイトルも含め、Olsen のテキストが作者と読者の新たな役割を提示していると言う。読者を対象物ではなく主体として据える対話型のテキストであり、*Tell Me a Riddle* というタイトルは他者に話すことを要求している (Coiner *Better Red* 239) と主張する。
- 7) 友人との再会場面において女性の友情関係の育ちにくさや継続の難しさが示唆されている。Eva の友人は記憶語りに登場する Lisa だけである。散歩をしているときに出会う Mrs. Mays は子供たちが小さかったときに近所に住んでいた女性で、David の友人ではなく Eva の友人であることが強調されている “A friend of hers, not his” (96)。女性の人生がしばしば中断される例として友情関係の中断が挙げられている。
- 8) Olsen がイタリック体や括弧とともに使う書き方のスタイルのうちの 1 つ、インデントとイタリック体が併用された箇所。前半 3 行は語りよりも 2 段インデントされ過去の回想を描写、後半 2 行は現在の視点が入り、踊りの躍動感と Eva の喜びを表現している。
- 9) Faulkner は二人のつないだ手をへその緒と読み取り、Jeannie を助産師とした Eva と David の互いの出産場面であると言う (Faulkner 55)。
- 10) “Never saw so many peaceful wrecks in my life....That’s what I want to be when I grow up, just a peaceful wreck holding hands with other peaceful wrecks (For Len and Helen are holding hands).” (22)
- 11) “Tell Me a Riddle” の Eva が養育者役割を拒否し個としての自己を求めた姿と Whitey が Lennie 一家の主婦役割を担うことで一家の一員として認めてもらおうとする姿は好対照を成している。
- 12) 注 8 同様、インデントを使った手法である。この部分は、本来の語りよりも一段インデントされた形で Parry の訪問が描写され、更に一段インデントされている。
- 13) Coiner は、Miss Campbell と Parry のやりとりを教会での牧師と教区民のりとりと同じであると言う。牧師と同じく、Miss Campbell は Parry に自分の問いかけに対しあらかじめ決められた反応だけを返すように仕向けていると指摘する (Coiner, “No One’s Private Ground” 185)。

Bibliography

- Banks, Joanna Trautmann. “Death Labors.” *The Critical Response to Tillie Olsen*. Eds. Kay Hoyle Nelson and Nancy Huse. Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1944. 158-168.
- Burstein, Janet Handler. *Writing Mothers, Writing Daughters: Tracing the Maternal in Stories by American Jewish Women*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1996.
- Coiner, Constance. *Better Red: The Writing and Resistance of Tillie Olsen and Meridel Le Sueur*. New York: Oxford University Press, 1995.
- . “‘No One’s Private Ground’: A Bakhtinian Reading of Tillie Olsen’s Tell Me a Riddle.” *The Critical Response to Tillie Olsen*. Eds. Kay Hoyle Nelson and Nancy Huse. Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1944. 169-195.
- Duncan, Erika. “The Hungry Jewish Mother.” *The Lost Tradition: Mothers and Daughters in Literature*. Eds. Davidson, Cathy N. and Broner, E.M. New York: F. Ungar Pub. Co, 1980. 231-41.
- Faulkner, Mara. *Protest and Possibility in the Writing of Tillie Olsen*. Charlottesville: University Press of Virginia, 1993.
- Frye, Joanne S. *Tillie Olsen: A Study of the Short Fiction*. New York: Twayne Publishers, 1995.
- Jones, Beverly. “The Dynamics of Marriage and Motherhood.” *Sisterhood is Powerful*. Ed. Morgan,

- Robin. New York: Random House, 1970. 49-67.
- Lyons, Bonnie. "Tillie Olsen: The Writer as a Jewish Woman." *The Critical Response to Tillie Olsen*. Eds. Kay Hoyle Nelson and Nancy Huse. Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1994. 144-157.
- O'Connor, William Van. "The Short Stories of Tillie Olsen." *Studies in Short Fiction (1963 Fall)*. South Carolina: Newberry College, 1963. 21-25.
- Olsen, Tillie. *Tell Me a Riddle*. New York: Dell Publishing, 1962.
- . *Silences*. London: Virago, 1980.
- Orr, Elaine Neil. *Tillie Olsen and a Feminist Spiritual Vision*. Jackson: University Press of Mississippi, 1987.
- Park-Fuller, Linda Marguerite. *Tillie Olsen: A Phenomenological Study of Consciousness with Implications for Performance*. Ann Arbor, Mich.: UMI, 1990.
- Pearlman, Mickey and Werlock, Abbey H. P. *Tillie Olsen*. Boston: Twayne Publishers, 1991.

(本学非常勤講師)